

助成番号：203

北京農業大学獣医学院に招かれて

山 田 純 三

獣医学科家畜解剖学研究室

1. 目 的

- 1) 中国政府農牧漁業部（日本の農林水産省から林を除いたもの）後援による北京農業大学主催の免疫組織化学の講義と実習。

- 2) 北京農業大学獣医学院解剖教研組との共同研究。
- 3) 中国での獣医学教育の視察。

2. 期 間

1984年9月15日～10月15日

3. 場 所

中華人民共和国（主な訪問先：北京農業大学、西北農学院）

4. 内 容

1) 免疫組織化学講習会：

北京農業大学獣医学院で1ヶ月にわたって行われた本講習会の後半（前半は中国の専門家が担当）を群馬大学内分泌研究所の井上金治助教授と二人で分担して行った。受講生は全国から選抜された22名で（10名が女性）、23才～60才、副教授～研究生（大学院生のこと）と幅広く、獣医が中心であったが医学部や海洋研究所からも参加していたし人民解放軍の獣医師（女性）も参加していた。私共は2週間のハードスケジュールを強行したが、受講生の熱心さと意欲には終始圧倒されっぱなしであった。60才の副教授の参加には、井上先生と二人で「若い人にこのような機会は譲ってやれば良いのに」と話し合ったものであったが、この老先生の熱心さには後で敬服した。しかし、なんと言っても若い研究生の貪欲な研究心と輝いた瞳が今でも忘れられない。畜大の学生にこの輝きが乏しいことが残念でならない。

2) 北京農業大学獣医学院解剖教研組との共同研究：

研究テーマの共通性がこの共同研究を実現させてくれたのであるが、この研究では Cross-pilon という珍しい中国特産の鳥の消化管内分泌細胞の形態学的研究を行っていたので、この標本に免疫組織化学的染色を施した。研究生を含めたスタッフと学术交流を行ない、今後の共同研究計画を話し合った。現在、鶉の消化管内分泌細胞に関して共同研究を行なっているが、今年の5月には鄧講師が1ヶ月来学される予定であるし、私も9月に再度訪中の予定である。北京農業大学獣医学院からは、現在2名が本学に留学中であり、両大学間の学术交流が増々盛んになることを祈ってやまない。

3) 中国の獣医学教育の視察：

中国には獣医学の教育を行っている大学あるいは学院は36あるとされているが、この中で7校は農牧漁業部立であり（日本のように文部省の下にはなく直接関係のある部に所属する）、他は省立（日本の県立）である。この7校は重点大学とされ、この中でも北京農業大学は最重点大学に指定された大学である。上記の他に中国人民解放軍獣医大学が長春にあるがこれは軍の組織下にあるので全く別格であるらしい。獣医師になるのに日本におけるような国家試験はなく、年間約2,000人の獣医師が卒業するとのことである。修業年限は5年で、大学院は碩士（日本の修士）課程が3年、博士課程は2～3年である。北京農業大学への入学は大変厳しく、

大学院への入学は3日間の入学試験で更に厳しく選抜されるとのことである。職場の選択は個人では出来ず政府機関の決定によることは他の大学と同じである。

獣医学院は、解剖、生理、生化学、病理、薬理、伝染病、寄生虫、外科、内科、繁殖、漢方獣医、実験動物の12の教研組(講座)で構成されており、獣医学科(学生定員30名)、漢方獣医学科(15名)、生物学科(15名)、実験動物学科(15名)の教育を行なっている。解剖学教研組は、教授-1、副教授-4、講師-4、助教(助手)-1、(3名位新規採用の予定)、高級エンジニア-1、エンジニア-2、技師-1、工人-1、研究生-7というスタッフで教育研究を行なっている。他の教研組のことは正確には知らないとのことであったが、推して知るべしであろう。

西安の西に位置している西北農学院獣医系(学科)も管見したが、ここも前述の7校の重点大学の1つであるにもかかわらず北京の獣医学院と比較すれば、北大と畜大との格差より大きいものを感じた。しかし、北京の獣医学院ですら新しい機器は日本、米国、西独より輸入され整備されているものの、日常繁用する消耗品、ガラス器具などの不足を感じた。

私が最も驚いたことは、大学教官の俸給の安さであった。私が聞いた所では、私と同年輩の講師の年収が、私共を送迎してくれた若い運転手のそれより低いとのことであった。この先生一家の月収が大学の講師をしている奥さんの月給を加えて約200元(約2万円)、ちなみに私が宿泊していた香山飯店のホテル代が1泊120元であった。私が帰国する前日の新聞に、中国の近代化の推進には知識層の待遇改善が必要であるとの論説があったので現在は少しは改善されているかも知れない。

幸運にも新中国建国35周年記念の国慶節に招待され、新中国の着実な発展、軍事力およびその潜在力の大きさを強烈に印象づけられた。急速な近代化および開放政策による歪みも感ぜられないことはなかったが、何せ1ヶ月という短期間の訪中であり、あの広大な国、膨大な人口の極々一部を見聞したにすぎないので軽率な私見は慎しむべきであろう。しかし、唯一確信を持って言えることは次の一点であり、これで本報告のまとめとしたい。

我が国は、中国を単に膨大な経済市場としてとらえることは厳に慎しみ、一衣帯水の真の友好隣国である中国の国家建設に協力するとの姿勢が必須であり、その為にも各分野における日中間の交流をさらに盛んにし、相互理解をより深めることが必要であろう。

最後に、今回の訪中のために御援助・御協力いただいた中国政府農牧漁業部、北京農業大学、帯広畜産大学後援会および帯広畜産大学に深謝いたします。